『東亜同文書院』関係資料調査記

大学院中国研究科
後藤峰晴

はじめに

一九九一年十二月より約十日間上海に滞在して、東亜同文書院大学が、その撤収時に現地へ残してきた関係資料の所在確認等について、きわめて初歩的ながら調査を行った。

もとより、今回の上海行きは、二年間の中国留学から帰国した一九八九年八月以来、年に一度は上海を見る機会を確保したいという漠然とした思いと、帰国後中断していた勉強の穴埋めのため、上海と南京の中間に位置する常州市の瞿秋白記念館を訪問して、一九八九年以後に出版された瞿秋白関係の書籍を買い求めること、そして、留学当時ご指導を仰ぎ、その後も、いろいろお心遣いもいただいたばかりか、大学院入学に際しては、中国の銘柄である茅台酒をわざわざお送り下さった上海大学文学院の先生にお会いするのが目的だった。

ただ、大学院の授業で、本学の『中日大辞典』編纂にいたる簡単な説明を受けた時、東亜同文書院大学が上海に残してきた資料が、上海図書館徐家滙分館にあるらしいということをうかがい、この機会に何とか、その資料の手がかりでも得られないものかと考えていた。

準備連絡

事情あって十二月になって、ようやく月末の上海行きが確定した。

そこで、再度東亜同文書院大学の残存資料について、本学先生方へお尋ねしたところ、「上海図書館徐家滙分館」の他、上海交通大学も調べられればということであった。

まず、以前より面識を得ていた上海市文化局局長孫濱氏へ、今回の東亜同文書院資料調査の主旨を連絡し、孫濱氏が北京出張から戻られるのを待って、翌二九日に御自宅でお会いいただける約束を得ることができた。

一方、上海交通大学については、上海社会科学院に勤務

される、モスクワ大学で学位を取得された、ある女性哲学博士に同様の連絡をした。その方のご主人が交通大学の先生である。

東亜同文書院の残存資料とは、紛れもなく日本帝国主義時代の遺物である。上海へ手紙を書く際に気になっていたことは、日本人である自分が、その資料（中国サイドからすれば接収品となる）を拝見願いたいと申し出ること、そのために力添え願いたいと依頼することが、依頼した相手方に思わぬ迷惑をかけはしないか、あるいは、不愉快な思いにさせるのではないかということであった。本学の先生からも、ことがことだけにあまり強く押すのは好ましくない旨、ご注意をいただいている。

大学院入学当初から、愛大の中国研究が東亜同文書院の歴史と無関係でない以上、何かの機会をとらえて、東亜同文書院についてきちんと勉強しておかなくてはならない、そんなことを考えてはいた。ただ〝東亜同文書院は帝国主義的侵略の一環である〟という紋切り型の理解を超えるために、冷静に東亜同文書院を受けとめる必要があるという思いが、今回の調査を始めるに当たっての、自身の基本的スタンスを決めていたようにも思われる。

孫濱氏は、さきに記したように上海市文化局局長という要職に就いておられるが、もともとは上海戯劇学院出身で、テレビドラマ『孫文』の主演を演じ、上海はもとより、広く全国にその名を知られる俳優である。だからこそ、孫濱氏へ宛てた手紙には、孫文と深く親交を結んだ山田良政・純三郎兄弟が東亜同文書院卒業生であること、このたび愛大がその御遺族より、孫文関係資料の寄贈を受けたことにも触れておいた。

また、国際交流課でパンフレット『愛知大学の中国研究と学術交流』をいただいて同封した。これには中国語版がなくて大変残念だったが、それでも表紙裏には、郭沫若氏の書が印刷され、日中国交回復より遥か以前の一九五五年に、中山大学副学長として馮乃超氏が来校された当時の写真が見られるなど、いずれも文化界で活躍されている孫濱氏には旧知の名前で、愛大と中国との交流史を見てとることもでき、このたびの東亜同文書院資料調査にも、何ほどかのご理解の得られることを願った。

瞿秋白記念館訪問

上海へ着いた十二月二六日はとても寒く、昼間の雨が夕方からみぞれに変わった。埠頭からそのまま和平ホテル脇の中国国際旅行社へ向い、翌日の常州行き、軟座特快の切符を買う。留学生の身分だった頃は安い硬座に乗ってばかりいて、よほどの事情がない限り軟座の切符を買うことはなかったので、上海―常州間の運賃など覚えていないが、それでも、高くなったと感じて出迎えてくれた友人に話すと「あなたが（一九八九年に）帰国してから、二度の運賃値上げがありました。」とのこと。外国人と中国人との〝料金差制度〟がなくなったことは歓迎すべきだが、二年間に二度の値上げという中で〝料金差制度〟が解消されたことに不安を感じざるを得なかった、あまりに急激な値上げではないかと。

その日のみぞれは、夜のあいだに雪となり、翌朝の上海発ハルピン行きは出発から遅れた。発車後も徐行運転が続き、二時間あまりの行程を、更に二時間半も要して常州へ到着した。

常州市はクリークに囲まれた典型的な江南の町である。だがこの年の夏は、その低地がわざわいして、長江大洪水では市のほとんどが水没し、その被災状況は『人民日報』でも写真入りで紹介されたほどである。〝江が民を（沢）ぬらす〟と、ある中国人の友人が言った。一九八九年六月四日の北京事件で失脚した趙紫陽共産党総書記に代わって登場した現総書記江沢民氏に対する、痛烈な風刺である。江沢民氏が中央政界へ躍り出た当時、元上海市市長であり、総書記就任の直前は共産党上海市委書記を務めていた経歴から〝上海のお金を北京へ持っていって出世した〟などとも言われた。上海人にはあまり評判がよろしくない。

瞿秋白記念館は、常州市政府庁舎の近くにある。駅からさほど遠くないので、雪でぬかるむ道を歩いてみたが、水害の爪跡は、少なくとも表面上見られなかった。記念館は前日二六日から四日間の休館に入っていたが、係員へパスポートを示し、記念館の参観はしない、ただ、瞿秋白関係の書籍をわけて欲しいと伝えると、暫くして館長の趙庚林氏が応対に出てこられ、幸いにも氏がすぐに当方の顔を思い出されて、暖かく招き入れて下さった。昼御飯まで御馳走になり、九冊の書籍をわけていただいた。残念なことに瞿秋白の「多余的話」（『言わずもがなこと』）に関する初の単行本「心憂書『多余的話』」が売り切れで、入手できなかったが、これも後日、出版元の上海社会科学院出版社社長陳俊言氏よりサンプル本を譲っていただいた。

同じく常州市内にある張太雷記念館へ行く途中、遠回りして郊外へ出てみたが、田畑はすべて雪の下で、洪水の跡を見ることはできなかった。趙庚林氏にそのときの様子だけでもうかがっておくべきだった。

常州駅を午後六時四五分発の汽車に乗って上海へ戻ったが、またしても遅れ、着いたのは十時半になっていた。上海はいてつくような寒さで、タクシーがまったく見つからない。上海駅脇のホテルへ行きロビーでタクシーを待ち、やっと来たタクシーの運転手に尋ねると路面が凍りついているから、もう行かない、これは規則だ、と言われた。

「上海図書館龍呉路蔵書館」について

二八日午後、復旦大学マルクス・レーニン主義教研室のある先生を、入院中の長海医院に訪ねた。雑談の折り、東亜同文書院資料のことに触れると「上海図書館徐家滙分館」とは、上海図書館徐家滙蔵書館のことであろう、その徐家滙蔵書館は地下鉄工事の際に建物が傾き危険になったので、蔵書資料を上海博物館へ移した、というお話であった。上海図書館徐家滙蔵書館が地下鉄工事によって傾いたという話は、孫濱氏からもうかがった、新聞に載っていたと。

約束の二九日午後、孫濱氏を御自宅に訪ねた。この日も寒く、最低気温はマイナス七度、昼間でもマイナス二度というから、外は冷凍庫の中と同じだ。孫濱氏の御自宅は外国領事館街のはずれに位置し、三棟の高層住宅は塀で囲ま

れ、入口では警察官が警備にあたっている。同じ高層住宅内には、公安局長等上海市の党・政・軍の幹部が住み、3LDKの部屋にはガス給湯設備もついた高級幹部専用住宅である。ところがこの日は寒さで水道管ばかりか、ガスに含まれている水蒸気が氷結してガス管までも凍り、孫濱氏はどうにもならないといった様子で「北京はどこでも暖房があるから、北京の方が暖かいよ」と苦笑された。

孫濱氏には事前に連絡がしてあったので、すでに上海図書館副館長孫厚朴氏へ話が通じているから、東亜同文書院資料に関する詳しい相談は孫厚朴氏へするようにとのことであった。

話の中で、孫濱氏は手紙に同封した『愛知大学の中国研究と学術交流』を熱心に御覧になられ、機会があれば是非愛知大学を訪問したいとも話された。ちなみに孫濱氏御夫妻は、昨年十二月に上海の日本総領事館へ「短期滞在」のビザ申請を出されたそうだ。

一方、交通大学の方は先方からOKの連絡がなく、何か問題があるのかも知れないと思って、それ以上こちら側から連絡をとることは差し控えてしまった。帰国後わかったことは、先方はこちらからの連絡を待っておられたそうで、残念なことをした。

孫厚朴氏の話では、上海図書館の日本語資料は龍呉路蔵書館にあるが、その中に東亜同文書院大学の接収品があるかどうかはわからない、また、東亜同文書院生の手書きによる「調査報告」はないとのことであった。更に、当時の接収品目録があるのではないかと尋ねたが、目録があるかどうかわからないということであった。最後に「必要なら三月末か四月初めにまた上海へ来ます」と孫濱氏へ話したことも伝わっていて、できるだけ早く具体的な資料名を連絡してくれれば、協力するともおっしゃって下さった。そこでこちらとしては、まず龍呉路蔵書館に行って現物を確認し、その上で再度相談にのっていただこうと考えた。極めてうかつだったのは、蔵書館を図書館と同じように考えて、一般閲覧できる施設と思い込んだことだった。

一月二日、上海植物園正面にある龍呉路蔵書館を訪問、応対された上海図書館保管部の方に五階へ案内された。

見たところ、上海図書館龍呉路蔵書館は比較的最近建てられた施設のようだが、日本語の文献は五階のエレベーター踊場と通路に人の背丈ほどの高さまでうず高く積まれたままかなり埃を被り、まったく未整理状態であった。その本の山の脇に図書カードボックスがあったが、話によれば、カードにある本がその〝山〟の中にあるかどうかわからないとのこと。またそれら日本語の文献が、どこから龍呉路蔵書館へ運ばれたかもわからないということだった

カードボックスは四角号碼により整理されていた。四角号碼による検字には全く馴れていないし、四角号碼字典がなければどうもならない。大学院へ入学した当初、ある先生から四角号碼による検字を強く勧められていたことを思い出した。保管部の人へ、試しに『東』の字を調べてみたいと言うと、すぐさま〝五〇九〇〟の番号の『東』をだしてくれた。「東部ソ領重要事項誌」から始まり、「東部西伯利亜経済調査資料」「東部内蒙古産業調査」「東部内外蒙古調査報告書」「東三省金融整理委員會報告書」等など、満鉄発行による資料の後に「東亜同文書院」という文字を見

つけた。カードに書かれている書体からみて、すべて一度中国側によって整理されたと思われる。この時、少しでも四角号碼に馴れていれば、「東」の簡体字番号〝四〇九〇〟にも気づき、その番号を探すこともできたはずであるし、そうすべきであった。文字どおり、後悔先に立たずである。

未公開資料ということで、図書カードの写真撮影は断られたが、筆記は認めていただけた。出されたお茶のコップを握っては指先を暖め記録した。

一枚一枚のカードをめくって筆記している間に孫厚朴氏と連絡をとられた様子で、帰り際には「まだ整理していないから、今すぐこのカードの本を探すことはできないが、具体的な書名をこちらに連絡してくれれば、三月までには探します。孫濱氏か孫厚朴氏に連絡してもいいよ」と、とても親切に言ってくれた。

なお、上海図書館徐家滙蔵書館の資料についてはカトリック教関係のフランス語、イタリア語、中国語文献が中心で日本語の文献資料はないとのことであった。

以下は、龍呉路蔵書館の図書カードを筆記したものである。

一、東亜同文書院大学東亜調査報告
昭和十五年度
寺田義三郎編輯　一九四一
上海　東亜同文書院大学発行
一九六九年轉庫　九三三頁

二、（東亜同文書院大学）東亜調査報告書（日文）
（昭和十四年度）
寺田義三郎（日）編
日本昭和十五年上海、上海同文書院大学
排印本、一冊一二七〇頁
一九六九年轉庫

三、（東亜同文書院大学）東亜調査報告書
編　者　東亜同文書院大学学生調査大旅行指導室
出　版　処　上海　上海東亜同文書大学
版　期　一九四二
頁　数　八七一
装　訂　精
収到日期　一九五六・一一・二八
来　源　工商局経済計画処移交

四、東亜調査報告書
編　者　小竹文夫
出　版　処　上海東亜同文書院大学
版　期　一九四二
冊　数　一
頁　数　八七一
装　訂　精
叢　書　名　東亜同文書院大学
収到日期　一九五六・八・二四
来　源　文管會舊存

五.
東亜同文書院大学東亜調査報告書
小竹文夫著　一九四二
上海　上海東亜同文書院大学
八七一頁

六.
東亜同文書院誌（創立三十周年紀念）
上海東亜同文書院編　一九三〇
上海東亜同文書院　一・六頁
一九六九年轉庫

七.
東亜同文書院創立三十周年紀念論文集
一九三〇　上海東亜同文書院支那研究部
六八〇頁　支那研究第二十二号
一九六九年轉庫

八.
「創立四拾年」東亜同文書院記念誌
東亜同文書院大学編
日本昭和十五年上海東亜同文書院大学
排印一冊　一六二頁
一九六九年轉庫

九.
東亜同文書院一覧
東亜同文書院編
缺版初頁
二〇四頁　有表図

一〇.
東亜同文書院大学東亜調査報告書（昭和十六年）
小竹文夫編
昭和十六年（一九四一）六月上海東亜同文書院大学排印初版一冊（九三三頁）
一九六九年轉庫

一一.
東亜同文書院大学学術研究年報（第一輯）
北野大吉著
日本昭和十九年日本評論社（東京）排印一冊

一二.
東亜同文書院大学東亜調査報告書
寺田義三郎編輯
出　版　処　上海　上海東亜同文書院大学
装　　訂　精
収　到　日　期　一九五六・一一・三〇
来　　源　華東教育部第一次移贈図書

一三.
東亜同文書院大学学術研究年報
著　　者　北野大吉
出　版　処　東京日本評論社
版　　期　一九四四
頁　　数　四〇八
収　到　日　期　一九五七・三・一四
来　　源　工商局経済計画処移交

一四．（創立四拾週年）東亜同文書院記念誌
出　版　処　上海東亜同文書院大学
版　　期　一九四〇
頁　　数　一六二
収到日期　一九五六・一〇・一五
来　　源　房移兪琦錫図書

一五．東亜同文書院大学学術研究年報
著　　者　北野大吉
出　版　処　東京　日本評論社
版　　期　一九四四
頁　　数　四〇八
収到日期　一九五七・三・一三
来　　源　上海公私合營銀行移贈図書

一六．東亜同文書院同学録（第三十三期生）
東亜同文書院編
（缺版初頁）有図照
一九六九年轉庫

一七．東亜同文會事業提要
版　　期　一九三四
頁　　数　七八
収到日期　一九五六・一〇・二三
来　　源　文管會舊存
一九六九年轉庫

一八．（増補東亜関係）特種條約彙纂
東亜同文會編
明治四十一年一月
丸善株式会社排印三版
一冊（一四五一、精一六）

図書カードについて

先にもカードはすべて一度中国側によって整理されたと思われると記したが、多くのカードに「一九六九年轉庫」とあるのは、すべて朱色のゴム印であった。ゴム印を用意したほどであれば、かなり大がかりな移転があったはずである。だがこの「轉庫」も何処から何処へ移されたのかわからないとのことであった。ただ、今から考えれば、こちらの質問の仕方が「何処から何処へ移されたか」という質問であったから、「わからない」と答えられただけで〝轉〟とはまさに「転移」の意味で「転出」「転入」の両義ではあっても、一九六九年以前の「収到日期」が記載されていて、且つ「一九六九年轉庫」という印の押されているものは「転出」以外有り得ないはずであり、従ってそれら資料は、あの〝山〟の中に残っている可能性はすくない、あるいはないと言った方が正しいと思われる。「わからない」とは「何処へ移管されたかわからない」の意味である。

カードは「上海図書館」のネームの入った図書カード用のカードと半紙を切っただけのもの、厚紙等いろいろだった。

今回みることのできた東亜同文書院関係一八枚のカードのうち、二枚は「来源」として「文管會舊存」という記載があるが、これについて、すでに退役したある解放軍幹部は、かつて人民解放軍に「軍管会」という組織があり、その組織は軍関係の接収を担当したから「文管會」は文化関係の接収組織ではないかということを話してくれた。また、「来源」に「上海公私合營銀行移贈図書」とある「上海公私合營銀行」とは、北方四銀行（旧中国北方の金融資本集団で塩業銀行、金城銀行、大陸銀行、中南銀行を指す）と南方四銀行（旧中国南方の金融資本集団で浙江興業銀行、浙江実業銀行、上海商業貯蓄銀行、新華信託貯蓄銀行をいう）が、その他の銀行も含めて一九五二年に合併し、中央銀行である中国人民銀行の指導下につくった銀行の、上海支店のことであろう。また、資料一四の「房移兪琦錫図書」とは個人の寄贈によるものであろう。

筆記してきたカードの中には、記載されている内容から判断して、同一資料と思われるのがいくつかある。便宜的につけた上記の番号でいえば、三、四、五および一一、一三、一五はいずれも同じ本が複数所蔵されているということであろう。

上海カードと愛大『目録』について

カードと『愛知大学図書館蔵書目録』を照らしてみたところ、以下については愛大にも所蔵されていると思われる。〰〰部は愛大『目録』の記述と同じであり、愛大『目録』に見られる異同部分については［　］を付けて記す。なお、九については、書名が一致するのみで頁数が異なり、上海のカードには年月日の記載がないので愛大『目録』と一致不一致を判断する決め手に欠く。

したがって、今回の調査でカード上一、三～五、七、八、一二、一四、一六、一七、一八の九点が愛大未所蔵資料ということになるが、一二は年月日も頁数も記載がなく、書名だけからは資料を特定し難い。

二、（東亜同文書院大学）東亜調査報告書（日文）
（昭和十四年度）
寺田義三郎（日）
［東亜同文書院大学学生調査大旅行指導室］編
日本昭和十五年上海、上海同文書院大学
排印本、一冊一二七〇頁
一九六九年轉庫

六、東亜同文書院誌（創立二十周年紀念）
上海東亜同文書院編一九三〇
上海東亜同文書院　一一六頁
一九六九年轉庫
（注：一九三〇年は創立三十周年である）

九、東亜同文書院一覧
東亜同文書院［東亜同文書院大学］編
缺版初頁

二〇四　［一七三］頁　有表図

一〇．東亜同文書院大学東亜調査報告書（昭和十六年［十五年度］）
小竹文夫［東亜同文書院大学学生調査大旅行指導室］編
昭和十六年（一九四一）六月上海東亜同文書院大学排印初版　一冊（九三三頁）
一九六九年轉庫

一一．東亜同文書院大学学術研究年報（第一輯）
北野大吉著
日本昭和十九年日本評論社（東京）排印
一冊

一二．東亜同文書院大学学術研究年報
著　者　北野大吉
出　版　処　東京　日本評論社
版　期　一九四四［一九三〇］
頁　数　四〇八
収到日期　一九五七・三・一四
来　源　工商局経済計画処移交

一五．東亜同文書院大学学術研究年報
著　者　北野大吉
出　版　処　東京　日本評論社
版　期　一九四四［一九三〇］
頁　数　四〇八
収到日期　一九五七・三・一三
来　源　上海公私合營銀行移贈図書

（愛大『目録』では『昭和十九年（一九三〇）』としているが、一一、一三、一五は『昭和十九年』、『四〇八P』、『東亜同文書院大学学術研究年報』の三項で愛大『目録』とつながる。それにしても、一枚の上海カードまで『一九三〇』としているのはどういうことか。）

おわりに

学部生だった頃、中国では一九四九年の解放以前に出版されたものは、原則として閲覧できないという話を聞いたことがあった。上海図書館保管部の方に徐家滙蔵書館の資料についてお尋ねした時も、「外国人には見せたことはない」とはっきり言われた。それが、今回非公式ながらもカードの拝見を許され、今後ともできるだけの調査協力をすると言っていただけたことの背景には、中国側の変化とともに、やはり愛大と東亜同文書院の関係、そして何より、愛大がこれまで中国について積み上げてきたものが、僅かながらも相手方に通じたのではないかと感じた。

今回の調査結果では一、三～五、七、八、一二、一四、一六、一七、一八の九点を愛大未所蔵資料としたが、書き取ってきた内容だけでは、愛大所蔵本とにわかに同不同判

別し難いカードもあり、そもそも愛大所蔵資料とも照合し尽くしていない部分、見落とした部分もあるはずである。今後、より正確に調査をしていきたい。

また、東亜同文書院がもともと南京にあったことを考えれば、当然南京も調べるべきであるし、今回拝見した数枚のカードの中にも満鉄の資料がいくつもあったことからすれば、逆に上海で出版されたものが大連へいったこともあるはずである。

戦後、日本語の文献資料は時に国民党支配下におかれ、その後は共産党統治下で「文化大革命」の洗礼を受けた。やっとそれらを掘り起こすことのできる時期にきたのである。

（後藤峰晴氏は、愛知大学大学院中国研究科から復旦大学大学院に進み、瞿秋白に関する研究を博士論文にまとめていたが、提出を目前にして一九九九年、不幸にも病没した。）